（京都学園大学経営学部論集　第16巻 第３号　2007年３月　57頁～73頁）

論　文

妊娠時心性と性役割観の関連について

橋　本　尚　子

要約　本研究の目的は１）妊婦の，胎児に対する感情に焦点をあてて，妊娠時の心性をとらえること，２）妊娠時の心性と母性性，性役割観との関連を検討することであった。母性性，性役割観については，現実の自分と，自分にとっての重要性の２つの次元からの評定を求めた。159名の妊婦から，有効なデータが得られた。結果は以下の通りであった。妊娠時の心性では，２つの因子が抽出された。胎児に対する肯定的な感情である〈積極的一体感の因子〉と，胎児への否定的な感情や、支配される感じを含む〈妊娠への違和感の因子〉である。積極的一体感は，現実次元の母性性，女性性だけでなく，男性性と正の相関を示した。妊娠への違和感は低ければ低いほど，重要性次元において，男性性を重要視する程度が高いことが明らかとなった。妊娠や胎児を受け入れていくことは，女性性，母性性だけでなく，ある程度男性性にも価値をおくことと関連していることが示唆された。

キーワード：妊娠，胎児に対する感情，母性性，男性性，女性性

問　題

現代では，従来のように子供を生み母親になるのが女性にとって当たり前のことではなく，女性の様々な生き方の選択肢のうちの一つとなってきている。そのため女性がいかに生きていくかについての新しい枠組みが模索されているといえる。しかし，そのような社会的意識的な方向性と，女性の身体，子供を宿し生む性としての女性，母という方向にずれが生じてくるのではないだろう

か。男女同等の教育を受け，意識的，精神的レベルでは男女の性差を意識することが少なくなっている現代の女性にとって，妊娠，出産，母になることという身体レベルでの女性としての体験はどのようなものであろうか。本研究では，現代の女性が身体も含んだ女性としての体験である妊娠をどのようにとらえているのかについて，性役割観との関連から考えたい。

妊娠時の女性の心性については，従来は産科学，看護学，助産学などの医療現場からの報告が多くなされている。女性の妊娠に関する心理学的な研究は，母性研究の立場から，いかに母親としての愛情がめばえたかということに焦点があてられてきた（牛島1955，大日向1988）。これらの研究では，愛着の芽生えた時期や，場面に焦点があてられており，妊婦が実際に，愛着の芽生えも含めて，胎児とどのような関係を有し，何を感じているのかは問題にされなかった。

妊婦の内的感情に焦点をあてるためには，妊娠中は，胎児が，まだ現実に目にみえる存在ではないという特殊の時期であることを考慮しなくてはならない。通常の母性研究であれば，母としての自覚や子どもに対する意識を，現実の母子関係に照らして，よりはっきりした形で扱うことができる（花沢1992；大日向1988）。しかし，妊娠中では，現実の子どもとの関係というよりも，まだ見ぬ，イメージとしての子どもとの関係についての感情が問われることになる[1)]。妊娠時の胎児への感情は，胎児そのものに対する感情というよりも，イメージとしての胎児に投影されている感情であるといえる[2)]。胎児との関係性や，内的感情について述べたものとしてはクラメール（1994）をあげることができる。妊娠中の母親が，胎児と自分を同一視すること，胎児に自分自身を重ね合わせ，か

1）この点について Deutsh（1964）は「胎児はまだ子どもという観念には程遠いため、妊娠時の胎児への感情は，胎児そのものに対する積極的あるいは否定的感情には根差してはいない」と述べている。

2）その例としては，妊娠中によく，「この子は死んだ○○の生まれ変わりである」などの言葉も聞かれる。妊婦にとって重要な他者が，お腹の子供に重ねあわされるのであるが，これもイメージとしての胎児との関係であり，投影の一つであると考えられる。

つて赤ちゃんであった自分の，母親に対する関係を生きながら，新生児の到来を夢見ることで，母となる未来の自分の準備をするということが示されている。また，Muilder（1992）によると，胎児を自分自身と同一視しつつも，別の存在としても認識すること，この一見矛盾する状態を揺れ動くことが妊娠中の母性獲得のプロセスとして述べられている。いずれも，胎児との一体感から生じる胎児と自分との同一視ということが，妊娠中の母親と胎児との関係性には生じていることがわかる[3)]。本研究でも，この点を考慮に入れたい。

従来の妊娠についての研究では，妊娠時が，出産後の育児過程へとつながりを持つ母性発達の初段階であるという側面のみが強調されていた。しかし，母性や，母らしさの自覚という意識的，表面的態度だけではなく，そこにいたる内的過程において，妊婦がどのような内的感情を体験し，イメージとしての胎児とどのような関係性を有しているのかを問うていくことが，育児ノイローゼや児童虐待など現代の母親，家族に生じている問題を考える上においても必要であろう。そのために，本研究では妊婦の一般的な赤ちゃんイメージではなく，妊娠という自分自身の体験により生じている感情をみていくこととする。

Deutch（1964）によると，妊娠に伴う女性の感情は二つの両面的な感情に分かれて葛藤している。一つは，生命の活気，愛情，母らしい誇り，幸福感であり，現実生活への外向的な姿勢を生み，出産に備えて養生に励むといった行動となる。もう一つは，意気消沈，恥辱感，憎悪，破壊，死などの感情であり，内向性として知られているものである。内向的傾向が強くなると，自分自身の身体に関心が向かい，優しさ，いたわり，注目を求めようとする欲求が非常に強くなるという。

---

3)　この同一視ということに関してDeutsh（1964）は「生物学的にも生理学的にも，母子同一性は，妊娠の全過程に大きな役割を果たしている。」と述べ，妊娠時における同一視の重要さを示唆している。

従来の母性研究では，前者の感情に重点がおかれ，後者の感情にはほとんど注意が向けられていない。その理由として，一般的に母性のイメージとして心に描かれやすいのが前者であるためと，後者は母親自身にもあまり意識されないことや，意識されたとしても，ネガティブな感情であるために表明されないことが多いためであろう。

母親の肯定的な感情だけでなく，否定的な感情にも考慮した研究としては，花沢（1992）をあげることができる。母親の子に対する感情を，接近感情と回避感情とが互いに独立する2次元としてとらえ，個人の中で両感情がいかに拮抗しているかを重視しようとしたものである[4)]。従来の研究にはみられない力動的観点を用いていることには大きな意義があるといえよう。しかし，花沢の対児感情質問紙による拮抗得点を指標とすると，両感情が共に高い者と，共に低い者が同じタイプとして扱われてしまい，両タイプの差が見出せないという問題がある。殊に妊娠という特殊な状況にあっては，回避感情自体が危機を乗り越えるための大切な要素になると考えられることからも，両感情が個人の中でどのような力動を持っているのかを，さらに詳しく見ていくことが必要となろう。

そこで本研究では，妊娠時心性を評定する尺度を作成することにした。否定感情を問うこと自体が妊婦に与えるダメージを少なくすること，かつ，否定的な感情は直接たずねても表現されにくいであろうこと，妊娠時には胎児との同一視が生じやすいことを特に考慮し，間接的に質問する形式をとった。質問項目を全て「ママ，わたしは～なの」というように，赤ちゃんが母親に話している形にし，赤ちゃんがどう思っていると思うかを問うという形式を用いて，間接的に妊婦自身の感情を問うこととした。

4）両感情の拮抗の度合いが高いほど，子供に対する動機や行動を阻害するという考えに基づくものである。

妊娠というと一般的にはすぐに母親や，母性のイメージと結び付けられがちである。しかし，実際妊娠している女性にとって，母性性はどのように意識され，妊娠時の心性とどのように関わっているのだろうか。これをみるために，母性性尺度を実施して，妊娠時心性との関係を検討する。

次に，妊娠という身体レベルでの女性としての体験と，社会的意識的な男性性と女性性，すなわち性役割観がどのように関連しているかを考察する[5)]。単純に考えると，妊娠や育児などの子どもとの関わりには，女性性が最も大切なことに思われる。では，そこでは男性性はどのような働きをしているのだろうか。必要ないのだろうか。あるいは，妨害的に働くのであろうか。これらの点を考察するために，妊娠時の心性と性役割観の関連をみる。その際，現実の自分にそれぞれがどの程度あてはまるかという現実性次元と，それぞれがどの程度重要かという重要性次元の２次元をみる。重要であると思っているのにも関わらず，自分はそれにはあてはまらないという場合には，その欠如感が意識されているのに対し，もともと重要ではないものが，自分にあてはまらないという場合には，欠如感も葛藤も意識されないという違いがあるからである。

方　法

尺　度

妊娠時心性尺度：この尺度を作成するために現在妊娠している者８名，妊娠経験のある者２名に対して，妊娠について，または，赤ちゃんについて感じていることを自由に記述してもらった。様々な記述があったが，筆者と，もう一人の心理学研究者の２名で，主として赤ちゃんとの関係や，赤ちゃんへの感情

5）通常，男性性，女性性の特徴としては，道具性と表出性（Parsons）がいわれる。本研究でも男性性，女性性をこの道具性と表出性の意味で用いることとする。道具性とは，目的指向性，他者の反応にあまり関わらないことを特徴とし，表出性は，人の反応への敏感さ，人間関係への関心を特徴とする。

に関する記述をとりあげ，分類した[6]。そこから今回の質問紙の項目の内容を作成した。保健婦，助産婦，25名の妊婦に質問紙を配布し，協力を求め，確認を行った。その後感想を求め，修正を加えた。肯定的な感情についての項目と否定的な感情についての両方の項目を16項目ずつ，計32項目作成した。「全く思っていない」１点，から「非常に思っている」７点の７段階評定で回答を求めた。「以下の項目について，赤ちゃんがどう思っていると思いますか。」という教示であった。

母性性尺度：山口（1986）をもちいた。母性性尺度の“子供を産んだことのある”の項目は，妊婦に対する調査であるため，まぎらわしいので省いた。母性性尺度と女性性尺度に共通する項目“献身的な”は，女性性尺度のみで扱った。７項目。あてはまらない～あてはまるの５段階評定（「あてはまらない」１点から「当てはまる」５点。）

性役割観尺度：伊籐（1978）の MHF-scale（masculinity, humanity, femininity-scale）より，男性性，女性性尺度として，masculinity と femininity を用いた。それぞれ10項目ずつ，計20項目。あてはまらない～あてはまるの５段階評定（それぞれ「あてはまらない」１点，から「あてはまる」５点)。それぞれについて，現実の自分と自分にとっての重要性の二つの観点からたずねた。

対象：妊婦300名

手続き：産婦人科外来２カ所，保健所１カ所にて妊婦に筆者が質問紙を手渡し，または担当者より配布してもらった。回収方法は無記名で郵送法を用いた。回収率は53.0％，有効数は159名であった。

6） 赤ちゃんへの肯定的感情（うれしい，楽しみなど），親しみの感情（早く会いたい，いつも一緒など），否定的感情（不安，悲しい，怖いなど），赤ちゃんとの協力関係（一緒にがんばろうなど），赤ちゃんに自分の人生や身体を支配される感じ（一人でしていた気ままな旅行ができなくなる，一人の自由がなくなる，および赤ちゃんからもっとよい母であることを要求されている感じ)。

調査時期：1994年９月から10月であった。

結果と考察

１．妊娠時心性尺度

主因子法バリマックス回転による因子分析を行い，２因子を抽出した。回転後の当該因子から，両因子に.40以上の負荷を持つ因子を多義項目であるとし，削除して再度因子分析を行った。得られた各項目の因子負荷量を Table 1 に示す。第１因子は，胎児との親密さや，協力関係，肯定的感情，親和感など，胎児とペアの存在としての母である自分を心地よいと感じ，受け入れようとする肯定的感情をあらわしているといえる。第１因子は，〈積極的一体感の因子〉と名づけた。この項目の合計を積極的一体感得点とした。内的整合性について，Cronbach の α 係数は.94，被験者全体における積極的一体感得点の平均値は87.20（SD=15.92）であった（Table 2)。

第２因子はこわい，不安，悲しいなどの否定的な感情の調子を主としながらも，要求などを含んでいた。これらの項目であらわされる感情を，ここでは妊娠という状況への違和感ととらえ，第２因子は〈妊娠への違和感因子〉と名付けた。この項目の合計を妊娠への違和感得点とした。内的整合性について，Cronbach の α 係数は.91被験者全体における妊娠への違和感得点の平均値は33.93（SD=13.34）であった（Table 2)。

２．妊娠時心性と性役割観の相関について

妊娠時心性尺度の積極的一体感得点，妊娠への違和感得点，２つの次元それぞれの母性性得点（現実　平均24.46標準偏差3.68，重要性　平均26.59標準偏差3.71）および性役割観得点（男性性　現実　平均31.74標準偏差5.91，重要性　平均38.68標準偏差5.65，女性性現実　平均29.48標準偏差5.35，重要性

Table 1　妊娠時心性尺度の因子分析

項目	因子負荷量		
	Ⅰ	Ⅱ	h2
24）ママと私（僕）は仲良しだね。	.828	−.205	.727
22）ママは私（僕）のこと大好きなんだね。	.808	−.332	.764
32）ママ，私（僕）はうれしいの。	.806	−.243	.709
14）私（僕）はママが好き。	.791	−.129	.642
18）ママ，一緒にがんばろうね。	.786	−.035	.619
10）私（僕）はママのおなかのなかでとても幸せなの	.765	−.230	.639
02）ママと一緒にいると楽しいの。	.760	−.209	.621
20）私（僕）は生まれるの楽しみだよ。	.745	−.193	.592
16）はやくママに会いたいよ。	.695	−.121	.497
12）私（僕）はママを幸せにするね。	.694	.024	.482
08）ママ，私（僕）はいい子でしょう。	.689	−.043	.476
06）いつでもママを信じているの。	.684	−.313	.565
04）ママといると安心するの。	.675	−.374	.595
28）ママは私（僕）にいっぱいお話ししてくれてるね。	.612	−.112	.387
26）私（僕）はママを守ってあげる。	.608	.167	.397
30）私（僕）はママのおなかでとてもいい気持ち。	.590	−.375	.489
13）ママ，私（僕）はこわいの。	−.220	.851	.772
03）ママ，私（僕）は悲しいの。	−.209	.813	.705
19）ママ，私（僕）は心細いの。	−.250	.793	.692
01）ママ，私は不安なの。	−.076	.791	.632
07）ママ，私（僕）は寂しいの。	−.232	.784	.668
05）ママ，私（僕）は怒ってるの。	−.197	.715	.549
21）私（僕）はママを困らせてる。	−.168	.699	.516
29）ママ，私（僕）のことそんなにイヤに思わないで	−.274	.680	.537
17）私（僕）は，ママのことすきじゃない。	−.335	.667	.556
15）ママ，そんなに怒らないで。	−.099	.591	.359
11）ママ，そんなにイライラしないで。	−.073	.516	.272
23）私（僕）はママをしんどくしてる。	.007	.476	.227
31）私（僕）は，ママの人生をひとりじめしたいの。	.210	.471	.266
寄与率（%）	30.7	24.2	
累積寄与率（%）	30.7	55.0	

第一因子：積極的一体感因子　（α＝.94）
第二因子：妊娠への違和感因子　（α＝.90）

平均33.67 標準偏差5.83）との相関を求めた（Table 3，4）。

① 第１因子と性役割観の関連について

第１因子は，現実次元，重要性次元それぞれの男性性，女性性，母性性のすべてと正の相関があった。胎児との一体感を抱くことは，単純に，母性性，女性

Table 2　妊娠時心性得点平均値と標準偏差，レンジ

	第1因子	第2因子
平　均	87.20	33.93
標準偏差	15.92	13.34
レンジ	16.0～112.0	13.0～67.0

Table 3　性役割観尺度，母性性の平均と標準偏差，レンジ

	現実次元			重要性次元		
	男性性	女性性	母性性	男性性	女性性	母性性
平　均	31.74	29.48	24.46	38.68	33.67	26.59
標準偏差	5.91	5.35	3.68	5.65	5.83	3.71
レンジ	18.0～47.0	17.0～41.0	14.0～33.0	23.0～50.0	19.0～50.0	15.0～34.0

Table 4　各因子と母性性，性役割観の相関

	現実次元			重要性次元		
	男性性	女性性	母性性	男性性	女性性	母性性
第1因子	.280**	.456**	.556**	.262**	.365**	.362**
第2因子	-.098	-.082	-.219**	-.240**	-.103	-.175*

***：p<.001　**：p<.01　*：p<.05

Table 5　各因子と母性性，性役割次元間格差の相関

	男性性	女性性	母性性
第1因子	-.047	-.050	-.208***
第2因子	-.069	-.025	.010

***：p<.001

性とのみ関連しているのではなく，母性性や女性性ほどではないにしろ，男性性とも関連があることがわかる。

第2因子は，重要性次元の男性性と弱い負の相関を示した。また現実次元の母性性及び重要性次元の母性性とも弱い負の相関があった。

② 次元間格差について

Table 6　母性性，性役割観各尺度の平均と分散分析，Duncan の下位検定

	HH（葛藤）	HL（一体感）	LH（違和感）	LL（無関心）	F値	
現　実						
男性性	33.76	32.50	30.11	30.70	2.84*	HH>HL,LL,LH
女性性	30.95	31.41	27.84	25.76	8.94***	HH,HL>LH,LL
母性性	25.57	26.16	22.63	21.94	15.69***	HH,HL>LH,LL
重 要 性						
男性性	40.14	40.18	35.94	39.00	6.67**	HH,LL,HL>LH
女性性	35.61	35.56	31.69	30.88	7.16***	HH,HL>LH,LL
母性性	27.76	27.70	24.96	25.94	6.68***	HH,HL>LH
重要性と現実の格差						
男性性	6.25	7.64	5.92	8.29	0.99	N.S
女性性	4.60	4.20	3.94	5.11	0.20	N.S
母性性	2.15	1.53	2.14	4.00	1.84*	LL>HL

***：p<.001　　**：p<.01　　*：p<.05

重要性の得点から，現実の得点を引いたものを，次元間格差とし，欠如感をあらわしているととらえ，男性性，女性性，母性性の次元間格差と各因子との相関を求めた。その結果，第１因子，積極的一体感因子は，母性性の欠如感とは負の相関があった（Table 5）。

3．タイプ

１）妊娠時心性尺度の２つの因子の項目得点の平均値によって被調査者を４つのグループに分けた。両因子の得点が高いものは積極的一体感も妊娠への違和感もともに合わせ持っているので葛藤型，第１因子が高く，第２因子が低い者は積極的一体感が強く感じられ，妊娠への違和感はあまり感じられていないので積極的一体感型，第１因子が低く，第２因子が高い者は積極的一体感はあまり感じられず，妊娠への違和感が強く感じられているので違和感型，両因子が共に低い者は，積極的一体感も妊娠への違和感も，ともに感じられていない

ので無関心型と名付けた。

2）次にグループそれぞれについて，男性性，女性性，母性性得点の平均を求め，分散分析と Duncan の下位検定をおこなった（Table 6)。

① 現実次元について

男性性は，葛藤型と，一体感，違和感，無関心型に有意差がみられ，葛藤型が高かった。女性性は，葛藤型，一体感型と，無関心型，違和感型に有意差がみられ，葛藤型，一体感型が高かった。母性性に関しても女性性と同じく，葛藤型と一体感型が，違和感型と無関心型よりも高かった。

③ 重要性要性次元について

男性性は，違和感型と，葛藤，一体感，無関心型に有意差がみられ，違和感型が低かった。女性性では，葛藤型，一体感型と，違和感型，無関心型に有意差がみられ，葛藤型，一体感型が高かった。母性性は，葛藤型，一体感型と違和感型に有意差がみられ，違和感型が低かった。

3）次元間格差について，分散分析と Duncan の下位検定をおこなった（Table 6)。男性性，女性性得点それぞれについては有意差はみられなかった。母性性においてのみ葛藤型と無関心型で有意差がみられ，無関心型が格差が大きかった。

4）各群の特徴を記述し性役割観との関連をみていく。

① 葛藤型は，胎児との一体感を強く感じつつ，同時に妊娠への違和感を感じている。しかし，単に否定的なものではなく，このタイプが，自身の感情をより分化してとらえているともいえる。母親へと変化していく現在の自分の状況をかなり意識していることであるとも考えられる。そのため，両感情のあいだに葛藤，あるいはゆれがあることがうかがわれる。しかし，関係性は必ずしも否定的なものではないといえるだろう。なぜなら，ある程度の葛藤やとまどいは，現在の状態から母親へと変化していく心構えの準備につながるものでも

あるからである。

性役割についてこの群は，現実次元での男性性が他の群に比べて有意に高いことが特徴である。現実，重要性次元ともに，女性性，母性性は積極的一体感型と差がみられない。男性性，女性性，母性性ともに積極的一体感因子と正の相関があったことからも，第一の因子のもつこのような傾向を高くもつことが考えられる。胎児と一体である自分を受け入れつつ，かつ胎児を自分とは別の存在として，違和感も感じるという両方の感情を持つことに耐えるには，女性性だけではなく，男性性も必要であるのかもしれない。その葛藤，あるいはゆれ自体が，母親という今までとは違う新しい自分をうみだす力にもなりうるとう点からみると，新しい状況に適応するための準備がなされているともいえる。胎児とともにひとつのペアとしてある自分と，胎児とは別の一人の自分であるという意識の間を，揺れている状態といえよう。

② 積極的一体感型は，胎児との積極的一体感が強く感じられており，胎児を自分とは別の存在，異質なものとしてはあまり感じてはおらず，妊娠や胎児に対する違和感が最も少ない群といえる。現状況への適応から考えると，おそらく4群の中で最も安定し，妊娠と胎児を受け入れているといえよう。関係性もほぼよいものと考えてよいだろう。しかし，心理的な危機が母親への準備ともなるという点から考えると，あまりにも一体感のみが強く感じられ，自分とは別の存在としての胎児がほとんど意識されない場合には，胎児との関係は，必ずしもよいものとはいえなくなる可能性もある。母親の側からの，一方通行的なコミュニケーションの可能性が考えられるからである。

現実次元で，男性性については，葛藤型より低く，違和感型，無関心型と差がなかった。女性性については葛藤型と差がなく，無関心型より高いことがわかった。母性性では葛藤型と差がなく，違和感型と無関心型よりも高かった。重要性次元では，男性性は，葛藤型，無関心型と差がなかった。女性性は葛藤

型と差がみられなかった。

③　違和感型は，胎児との一体感はあまり感じられておらず，自分とは別の，異質な存在としての胎児が強く意識されている。否定的感情が強く感じられていることから，妊娠という状況が本人にとって否定的に感じられているといえる。胎児や妊娠について，また自分が母親になることについて非常に違和感を感じている群といえる。

性役割観では，重要性次元の男性性に4群の中では最も価値をおいていないことが特徴としてあげられる。妊娠への違和感が強いことと，男性性を重要視しないことが関連しているといえる。現実次元の男性性，女性性については積極的一体感型と差がみられないことからも，この群の特徴は重要性次元にあるといえる。このことについて，おそらく，この群の妊娠への違和感や否定的感情が，あまり外に対して表現される類いの感情ではなく，内向するものであろうことと考え合わせると，目的指向性などを特徴とし，社会的に高く評価される要因である男性性とは，相いれないものであり，それが男性性を重要視しないことにつながるのかもしれない。重要性次元の母性性，女性性についてもやや低いことから，この群にとっては，母性性，女性性も含む肯定的な項目自体を重要視することが，しにくい状態であるのかもしれない。

④　無関心型は，積極的一体感の因子も他の群とくらべて低く自分とは別の異質な存在であるものとしての胎児に対する認識も，他に比べて低い群といえる。これらのことから妊娠や胎児に対する異質な感じがないため葛藤も低いが，胎児との一体感もコミュニケーションも他よりは希薄であるといえるだろう。妊娠以前の状態と，現在の状態が，あまり違ったものとしては感じられていないといえるかもしれない。胎児との関係が弱い群であり，未分化であるといえる。

性役割観では，現実次元で，男性性が積極的一体感型，違和感型とほぼ等し

い。重要性次元で，男性性を重要視している程度も葛藤型，積極的一体感型とほぼ等しい。しかし，女性性は現実次元，重要性次元ともに，葛藤型，積極的一体感型に比べて有意に低く，違和感型とは有意差がみられない。母性性については，現実と，自分にとっての重要性の次元間の差が一体感型に比べて有意に高い。つまり自分では母性性が重要であると思っているのにも関わらず，現実の自分には母性性があまりないという感じである。母性性の重要性と現実という次元間格差が，第１因子である一体感を感じる因子と負の相関をもっていたことからも，この群が他の群よりも，一体感をもちにくいことが裏付けられる。母になることをあまり意識していない群であるといえる。

総合的考察とまとめ

葛藤型は，特に男性性の高さが特徴的であった。現代の教育は主に男性性に価値をおくものであり，物事に能動的に関わり，目標を達成することが評価の対象になっている。社会においてもそのような意味での自己実現がもてはやされている。その中で生き，教育を受けてきた女性が妊娠に直面して，胎児を受け入れることを学ぶ。この体験はおそらく初めてと言ってもいいほどの，他者（胎児）のために存在する自分，他者（胎児）の環境としての自分という体験なのではないか。この群はそのような意味での男性的な今までの自我と，胎児を受け入れていくことの間をゆれている状況と考えられる。

次に積極的一体感型は，葛藤型とよく似た性役割観を持っているが，男性性が，葛藤型と比べて低いことが特徴である。この両者の違いから，妊娠を受け入れ，安定することと，高い男性性は，相反する傾向にあることが考えられる。しかし，高い男性性が，必ずしも妊娠について不安定な状態と結びつくとはいえないことは，心理的にかなり不安定な状態にあることが推測される違和感型において，男性性は，それほど高くはなく，積極的一体感型と差があるとはい

えないことである。このことからも，葛藤型の不安定さと違和感型の不安定さは質が異なるであろうことが推測される。

違和感型は，男性性を重要とみなす度合いが4群中もっとも低い。ではこの男性性についての価値の低さは何を意味しているのだろうか。その一つの推測として，妊娠という状態を受け入れていくのは，妊娠を望む，望まないに関わらず，単純な消極的な受容ではなく，能動的な受容であるということが考えられる。そのような意味での能動性，積極性の乏しさが男性性に価値をおかないことに反映されているとも考えられる。

無関心型では，性役割について，この群のみにみられる明確な特徴はあげられない。母性性の次元間格差に関して，唯一，積極的一体感型とは有意な差が見られたということのみであった。かしし，それ以外の群とは差が見られなかった。違和感型とよく似た性役割観をもっているが，男性性を重要とみなしている点が，違和感型とは異なっている。

以上どの群であっても，一般的に否定的と言われる感情の中に，何らかの胎児との関係性の萌芽を見，そこから，新たな関係が生まれて行く可能性を見いだすことが大切なことであるといえる。従来の母親のイメージに捉われて母親としての未熟さや，母性の欠如という言葉で母親を責めるのではなく，母親自身に，そして，将来母親になるかもしれない人に，また母親をとりまくまわりの人に必要とされているサポートや教育を考え直していく必要があるといえる。渡辺（1980）は女性に進学や就職の道が開かれており，女性の自我意識が発達している反面，学校教育は，情緒面への配慮が欠落し，人間学的な指導を行っていないため，思春期の女子に歴史上かつてない危機をもたらしていると指摘している。思春期だけでなく妊娠時，その後の育児においても同様の問題が存在すると考えられる。男女の性差は身体のレベルでは歴然としている。にも関わらず，精神的レベルではほとんど性差がないかのように生きている。妊娠や

出産は，このギャップを女性につきつけるものとなる場合もあろう。現代の女性が自分の身体性も含んだ女性性を持ちながら，男性性ももつことは大変難しいことのように思われる。そのような難しさを生きる現代の女性について身体のレベルも含めて考えていくことが必要であろう。

反省と今後の課題

一言に妊娠といっても，その環境や，生理的状態など，様々な要素が存在し，単純な型にはめられるものではないことは承知の上で，本研究ではその心性を捉える大枠として，あえて便宜上4群に分割した。今後は個人に焦点をあてた研究により，さらに丁寧に捉え直すことが必要であろう。また今回はふれられなかったが，4つのタイプは固定的に考えられるものではなく妊娠の進行にともない変化していく可能性もあり，今後縦断的研究や，実際の事例などをさらに詳しく検討してく必要もあると考えられる。また本研究により，男性性，女性性，母性性とはそもそもどういうものであるのかを再度考えていくことが必要と思われた。男性性や女性性，母性性の質は，各群で異なることが推測されたからである。

《参考文献》

蘭香代子　1989　母親モラトリアムの時代　北大路書房

Bem, S.L., 1974 The measurement of psychological androgyny. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 42, 155-162.

クラメール　小此木啓吾　福崎裕子訳　1994　ママと赤ちゃんの心理療法　朝日新聞社

Deutsch, H.　原百代・懸田克躬訳　1964　母親の心理2　生命の誕生　日本教文社

Dinora, P. 1982 The relevance of early psychic development to pregnancy and abortion. International Journal of Psycho Analysis, 63, 311-319.

深津千賀子　母性拒否症候群の治療　小此木啓吾　渡辺久子編　別冊発達9　乳幼

児精神医学への招待　Pp. 189-198.
花沢成一　1992　母性心理学　医学書院
H. スィーガル　岩崎徹也訳　1992　メラニー・クライン入門　岩崎学術出版社
伊藤比呂美　1992　よいおっぱい悪いおっぱい　集英社
伊藤比呂美　1993　おなかほっぺおしり　集英社
伊藤比呂美　1994　コドモより親が大事　婦人生活社
伊藤裕子　1978　性役割の評価に関する研究　教育心理学研究　26，1～10.
伊藤裕子　秋津慶子　1983　青年期における性役割観および性役割期待の認知教育心理学研究，31，14　6-151.
柏木恵子　1972　青年期における性役割の認知 教育心理学研究，20，48～58.
柏木恵子　1974　青年期における性役割の認知　教育心理学研究，22，205～215.
Muilder, M.D. 1992 A Woman's Attitude Toward Pregnancy. The Jounal of Reproductive Medicne, 37, 339-342
大日向雅美　1988　母性の研究　川島書店
小此木啓吾・渡辺久子編　1989　別冊発達 9　乳幼児精神医学への招待
小此木啓吾・小島謙四郎・渡辺久子編　1994　乳幼児精神医学の方法論　岩崎学術出版社
Parsons, T. & Bales, r.f., Socialization and Interactional Process, The Free Press, 1953
橋爪貞雄ほか訳　核家族と子どもの社会化　黎明書房　1970
Robson, K.S., & Moss, H.A. 1970 Patterns and determinants of maternal attachment. Journal of Pediatrics, 77, 970-985
斎藤久美子　1990　「青年期後期と若い成人期—女性を中心に—」『臨床心理学体系 3　ライフサイクル』
橘由子　1993　子供に手を上げたくなるとき　学陽書房
牛島義友　1955　家族関係の心理　金子書房
渡辺久子　1980　女性のアイデンティティと出産　助産婦雑誌　34　No9　2-7
Winnicott, D.W., 成田善弘　根元真弓訳　1993　赤ん坊と母親　岩崎学術出版社
山口素子　1985　男性性・女性性の二側面についての検討　心理学研究，56，215～221.
山口素子　1986　女性性の諸側面について　京大教育学部紀要，32，248～258